

令和6年度

入学試験問題

# 国語

---

※試験開始のチャイムや合図があるまで開かないこと

〔注意事項〕

1. 問題用紙は、11ページまでである。
2. 解答は、すべて別紙の解答用紙の所定欄に記入すること。
3. 解答用紙への記入は、試験開始後に記入すること。
4. 解答用紙には出身中学校・受験番号・氏名を必ず記入すること。
5. 試験開始の30分後から退場はできるが、解答用紙は必ず裏返して退場すること。
6. 問題用紙は、各自で持ち帰ること。

常磐高等学校

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。句読点は字数として数えること。

わたしは職業柄、深夜に仕事をして、朝寝で昼に起きることが多く、出勤も午後からが多いので、家を出る直前に「昼どき日本列島」というNHKのテレビ番組をよく見ます。あるとき、埼玉県のある村の子どもの花祭りを紹介していました。五月のツツジの季節で、子どもたちは満開のツツジの花をちぎっては、大きな籠に入れていました。そうして花でいっぱいになった籠をみんなが持ち寄ると、その花を道でたがいにぶちまけあいでしたんです。

村の大人たちが大事に育てた花を、残酷にも引きちぎったり、むしったりするなんて、本来は許されたいはずですが、(A)、それを道にぶちまける。あとの掃除のことを考えてもそれはしてはいけないことです。(B)、一日だけそれが許される。このお祭りは、いたい何なんだろう。だれかが一所懸命に育てた花を摘んで、それをおおびらに捨てる、あるいはたがいにそれを投げつけあう。これは何だろうと、ずっと気になっていました。

その後、前衛的<sup>\*</sup>といってよい華道家の生け花を間近に見る経験をしました。華道というのは、とにかく美しい花をきれいに生けて室内を飾るものぐらいにしか考えていなかったわたしは、驚いてしまいました。

「生け花」と言いながら「殺し花」だからです。その花は、枝から切ったり、土から抜いてきたりしたものです。それを美しく見せるために、枝を折ったり、余分な葉をそぎ落としたり、キョクタンな場合には花を一輪しか残さないこともあります。枝を切る、割る、葉をむしる、裂く、ちぎる。最後に、だめ押しのように剣山<sup>\*</sup>にブスツと刺す。人間だったら、拷問そのものです。栄養をやったり虫をとったりと大事に育てた花も、何日もかけて山奥から探してきた枝も、ポキンと折ったり、裂いたり、葉をむしったりする。そういうものが、じつは生け花です。じつは、先ほどの花祭りによく似ているんです。大事に育てたものをいじめ抜く、殺す。そうすることがひとつの日本文化として伝承されているのです。華道という文化として伝承されている。これは、いったい何でしょう。

なんだ、わたしたちが毎日やっていることじゃないかということに気がつきました。わたしたちが生きる、その実相ではないかということ

です。わたしたちが食べるものは、塩などをのぞけば、ほとんどが生きものです。肉、魚、野菜、果物、砂糖、酒―すべてのいのちあるものからできています。わたしたちは毎日、これを何度かに分けて、たえず体内に入れなければ生きてゆけません。①わたしたちが生きるということだから、別のいのちを殺すことなのです。「別のいのちをいただく」ことです。だから、「いただきます」と手を合わせる。「ごめんなさい、いただきます」と言っ

て、いただきます」と言っ

しかも、わたしたちの食べているものは、肉にしても牧畜というかたちで育てたものです。野生の牛じゃない。食べ物にあたえて、毛を梳いてあげて、ときにはビールまで飲ませて、大事に育てて、それを殺していただいている。野菜も、果物もそうです。農家の方は、天候を気

にかけながら、慈しむようにして野菜や樹木を育てる。それをちょんぎって、箱詰めにして流通させる。そして、だれかの口に入るのです。華道と同じです。

埼玉県の花祭りも、華道家がしていることも、わたしたちが日常やっていることなのです。そのことを、わたしたちはきちんと見ていないのです。その（C）をしつかりと目に見えるかたちにし、生きるとはこういうことなんだと、まざまざと思い知らせるのが右の花祭りと華道だったのです。

わたしの好きな詩人の一人に長田弘さんという方がおられます。その方に、こういう言葉があります。「見えているだれも見えていないものを見るようにするのが、詩だ」。この詩の定義は、哲学にも当てはまると思っています。見えているのにだれも見えていないものを、見えるようにする。言葉で見えるようにする。これが哲学の仕事だと思えます。

いまの日本人は、これと反対のことをしています。食生活を考えてみても、スーパーマーケットでは、いのちあるものを殺したことが見えないように工夫されています。肉はサイコロ状にしてあったり、薄く切ってバラの花のように、芸術品のようにしてあったりします。魚は切り身や短冊の刺身にして、もとの姿が思い浮かばないような姿で売られています。果物や野菜も、サイズが揃ったものだけを入荷して、透明なフィルムでラップされて売られている。

②怖いことに、肉も果物も魚も、日用品と同じ感覚です。ツルツとした薄いフィルムの感触を共通してもっています。肉をさわっているつもり、野菜をさわっているつもりで、わたしたちの身体が経験しているのはフィルムの感触です。とくに一九七〇年代以降に生まれたひとたちは、ラップされた肉をさわっても、フィルムをさわっているとは思わなくらいあたりまえのことになっています。

触覚は物のリアリティ、現実を知るうえで重要な感覚です。押しでもがんとして動かないその感触が、現実というのは思うようにならないんだという実感をあたえてくれます。そういう現実感覚の根っこにある触覚に、なにか大きな変化が起こっている可能性があるのです。

かつては、みずから家で魚をさばくとか、出産を手伝うとか、死後の遗体処理を手伝うなどをしていました。それを、病院やスーパーマーケット、レストラン、クリーニング屋、<sup>\*</sup>し尿処理業者など、外部のサービス機関に委託するようになった。これが社会の近代化なのです。そのなかでわたしたちは、生きることの根本にあるものに、まるでラップ・フィルム越しにしかふれることができなくなってきた。そういうときに、右の花祭りや華道は、もう一度ラップ・フィルムをはがして、生きるとはこういうことですよ、ひとは別のいのちをいただいで生きていくんですよ、と教えてきたのです。

そういういのちの炎は、ある意味で種から別の種、さらに別の種へのバトン・レースのように移動します。生きるといふことのこういう実相を眼に見えるかたちで伝え、「このことを忘れてはいけないよ」と言っている。この意味で、華道も花祭りも、「生きる」ことに関連して、ある哲学的な考え方を宿していると言つてよいと思えます。それを言語的に表現するのが、哲学の役目なのです。

（鷲田清一『死なないでいる理由』による。一部改変）

※前衛的…芸術活動の先頭に立って、新しい試みを行っていること。  
※し尿…大便や小便。

※剣山…花を突きさして固定する生け花の道具。

問一 本文中の キョクタン の傍線部に相当する漢字を次の中から一つ選び、番号を書け。

- 1 棒のセンタンに触れる。
- 2 家族と離れてタンシンで暮らす。
- 3 タンセイを込めて作った作品。
- 4 仕事のフタンが多くなるようにする。

問二 本文中の ( A )、( B ) にはどういう言葉を入れればよいか。その組み合わせとしてもっとも適切なものを、次の中から一つ選び、番号を書け。

- 1 A それで B しかし
- 2 A あるいは B だが
- 3 A さらに B つまり
- 4 A しかも B でも

問三 本文中の ( C ) に入る語を、本文中から漢字二字で探し、そのまま抜き出して書け。

問四 傍線部①「わたしたちが生きているということはだから、別のいのちを殺すことなのです。」と同じような意味の語を、本文中から七字で探し、そのまま抜き出して書け。

## 問五

本文中に傍線部② 「怖いことに、肉も果物も魚も、日用品と同じ感覚です。」 とあるが、なぜ「怖い」のか。その理由の説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号を書け。

- 1 わたしたちの身体が経験しているのは物の実際の感触とは異なる感触であり、現実感覚の根っこにある感触に大きな変化が起こっている可能性があるから。
- 2 いのちあるものを殺しているということが感じられず、別のいのちをいただいて生きているというわたしたちの生の実相を知ることができないから。
- 3 透明なフィルムでラップされて売られたものであり、それにさわっても肉や果物や魚のもとの姿を思い浮かべることがはもはやできなくなってしまうから。
- 4 ツルツとした薄いフィルムの感触を共通してもっており、実際の肉や果物をさわっているという実感を持つことができなくなっているから。

## 問六

本文で筆者は「花祭りや華道」の働きについて、どのように述べているか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、番号を書け。

- 1 生きることの根本にあるものを隠してきたという、近代化というものの実相を知らせてくれている。
- 2 普段行っているのに気づいていない、生きることの根元にあるものをはつきりと教えてくれている。
- 3 生活の中で見過ごしていたためにわからなかった、生きることに対する疑問を解明してくれている。
- 4 物の実際の感触を直接経験できないのが、われわれの生の実態であることを明確に示してくれている。

次の文章を読んで、後の各問いに答えよ。句読点は字数として数えること。

えたいの知れない不吉な塊かたまりが私の心を始終おさえつけていた。焦燥しょうそうというおつか——酒を飲んだあとに宿酔しゅすいがあるように、酒を毎日飲んでいると宿酔に相当した時期がやってくる。それがきたのだ。これはちよつといけなかった。結果した肺尖カタルはいせんや神経衰弱がいけないのではない。また背を焼くような借金などがいけないのではない。いけないのはその【A】だ。以前私を喜ばせたどんな美しい音楽も、どんな美しい詩の一節も辛抱がならなくなった。蓄音器じゅくおんきを聴かせてもらいにわざわざ出かけて行っても、最初の二、三小節で不意に立ち上がってしまいたくなる。何かが私を居たたまらずさせるのだ。それで【B】私は街から街を浮浪し続けていた。

①なぜだかそのころ私はみすばらしく美しいものに強くひきつけられたのを覚えている。風景にしても壊れかかった街だとか、その街にしてもよそよそしい表通りよりもどこか親しみのある、汚い洗濯物が干してあったり、がらくたが転がしてあったりむさくるしい部屋が覗いていたりする裏通りが好きであった。雨や風が蝕むしばんでやがて土にかえつてしまふ、といったような趣のある街で、土塀が崩れていたり家並みが傾きかかっていたり——勢いのいいのは植物だけで、②時とすると吃驚びっくりさせるような向日葵ひまわりがあつたりカンナが咲いていたりする。

時々私はそんな路を歩きながら、ふと、そこが京都ではなくて京都から何百里なんひゃくりも離れた仙台とか長崎とか——そのような市へ今自分が来ているのだ——という2サツカクを起こそうと努める。③私は、できることなら京都から逃げ出して誰一人知らないような市へ行つてしまいたかった。第一に安静。がらんとした旅館の一室。清浄な蒲団ふとん。匂いのいい蚊帳かやと糊のりのよくきいた3浴衣。そこで一月ほど何も思わず横になりたい。希ねがわくはここがいつのまにかその市になっていたのであった。——サツカクがようやく成功しはじめると私はそれからそれへ④想像の絵の具を塗りつけてゆく。なんのことはない、私のサツカクと壊れかかった街との二重写しである。そして私はその中に現実の私自身を見失うのを楽しんだ。

(梶井基次郎『檸檬』による。一部改変)

宿酔：酒の酔いが翌日まで残ること。酒を飲み過ぎた日の翌日に起こる頭痛、胃痛、吐き気などの中毒症状。

肺尖カタル：肺上部の炎症。肺結核の初期症状。

蓄音器：アナログのレコード盤から音を再生する装置。

蚊帳：夏の夜、蚊や害虫を防ぐため、四隅を吊って寝床を覆う道具。麻や木綿で粗く織る。

何百里：一里は約四キロメートル。

問一 傍線部 1 ～ 3 の漢字はその読みを平仮名で書き、カタカナは漢字を書け。

問二 空欄 A・B に入る語句を、A は五字以内で、B は三字以内で文中より抜き出せ。

問三 傍線部①「なぜだかそのころ……覚えている」から「私」は自分の心情をどのようにとらえていることがわかるか。その説明として適当なものを、次の中から一つ選び、番号を書け。

- 1 自分自身の心情を正確に分析できずに困っている。
- 2 自分自身の心情を説明できないことに腹立たしさを感じている。
- 3 自分自身の心情に対して恐怖感を抱いている。
- 4 自分自身の若いころの心情を懐かしく思っている。
- 5 自分自身の病的な心情をまるで他人事のようにとらえている。

問四 傍線部②「時とすると……咲いていたりする」とあるが、「私」は「向日葵」や「カンナ」の何に対して「吃驚」したのか。その説明として適当なものを、次の中から一つ選び、番号を書け。

- 1 みすばらしい街と対照的な鮮やかな色と生命力。
- 2 美しい音楽が形を変えたような可憐な姿。
- 3 傾いた家の花でごまかそうとする住人への不信感。
- 4 整然とした裏通りの雰囲気壊しかねない存在感。
- 5 私を幸福な気持ちへといざなうほどの明るさ。

### 問五

傍線部③「私は、……行ってしまいたかった」とあるが、このような気持ちに「私」がなった最も切実な理由は何か。その説明として  
適当なものを、次の中から一つ選び、番号を書け。

- 1 京都にはみすぼらしくて美しい風景が少なかったから。
- 2 不吉な塊に心をおさえられた状態から逃げたかったから。
- 3 京都を離れ、きれいな部屋でゆっくりしたかったから。
- 4 旅には詩などで得るよりもっと大きな刺激があるから。
- 5 京都には知り合いが多いため、嫌悪感を覚えるから。

### 問六

傍線部④「想像の絵の具を塗りつけてゆく」に用いられている表現技法は何か。適当なものを、次の中から一つ選び、番号を書け。

- 1 擬人法
- 2 直喩ちよくゆ
- 3 対句法
- 4 隱喩いんゆ
- 5 倒置法



三

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

久しく隔たりて①逢ひたる人の、わが方にありつる事、かずかずに残りなく語り続ける **A**、②あいなけれ。隔てなく馴れぬる人も、ほど経て見るは、恥づかしからぬかは。 **A** つぎざまの人は、③あからさまに立ち出でて、息もつぎあへず語り興ずるぞかし。よき人の物語するは、人あまたあれど、一人にむきて言ふを、おのづから人も聞くに **A** あれ。よからぬ人は、誰ともなく、あまたの中にうち出でて、見ることのやうに語りなせば、皆同じく笑ひ④ののしる、いとらうがはし。をかしき事を言ひてもいたく興ぜぬと、興なき事を言ひてもよく笑ふにぞ、品のほどはかられぬべき。人のみざまのよしあし、才ある人は **B** その事など定め合へるに、己が身をひきかけて言ひ出でたる、いとわびし。

(兼好法師『徒然草』による。一部改変)

問一 傍線部①の読み方を現代仮名遣いに直して、ひらがなで書け。

問二 傍線部②・③・④の意味として最も適切なものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号を書け。

- |   |           |          |         |            |
|---|-----------|----------|---------|------------|
| ② | 1 すばらしい   | 2 つまらない  | 3 奥ゆかしい | 4 愛情がない    |
| ③ | 1 ほんのちよつと | 2 おおつぴらに | 3 同様に   | 4 思い通りに    |
| ④ | 1 馬鹿にする   | 2 悪口を言う  | 3 大声で騒ぐ | 4 ひそひそ話をする |

問三 **A** に入る係助詞で、正しいものを次の中から一つ選び、番号を書け。

- |   |    |
|---|----|
| 1 | ぞ  |
| 2 | なむ |
| 3 | や  |
| 4 | こそ |
| 5 | か  |

問四 二重傍線部 **A** 「つぎざまの人」とほぼ同じ意味を表す語を本文中より抜き出せ。

問五 二重傍線部B「その事」は何を指しているか、本文中より抜き出せ。

問六 「よき人」「よからぬ人」の会話について、筆者の考えにふさわしいものをそれぞれ次の中から一つずつ選び、番号を書け。

「よき人」

- 1 久しぶりにあった人に話をするときも、最近のことを分かりやすく話す。
- 2 大勢の前で話をするときも恥ずかしがらずに大きな声で堂々と話す。
- 3 一人に向かって話していても、自然と周囲の人も聞くようになる。
- 4 興味深い話をしているときも笑顔を絶やすことなく品位を保って話す。

「よからぬ人」

- 1 久しぶりにあった人に話をするとき、説明が下手で相手が理解できない。
- 2 誰に対してともなく、大勢の中にのりだして目の前のことのように話す。
- 3 一人に向かって話していても、周囲の人を自然と巻き込んで話す。
- 4 興味深い話をするのが苦手で、すぐに自分の身の上話をしてしまう。

四

漢文に関する次の問いに答えよ。

(1) 返り点に従って読み、Xの読む順番を数字で書け。

	i	
	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
		。

  

	ii	
<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>		。

(2) 次の漢文を読み後の問いに答えよ。

(戦国時代、趙は強国の秦に攻め込まれ、齊と燕に援助を受けていた。)

【本文】

①趙無以食、請粟於齊。

而齊不聽。

②蘇子謂齊王曰、

「趙之於齊・燕、隱蔽也。

猶齒之有唇也。

唇亡則齒寒。

今日亡趙、則明日及齊・燕矣。」

(劉向『戦国策』による。一部改変)

【書き下し文】

趙以て食するもの無く、粟を齊に請ふ。

而るに齊聽さず。

「

趙の齊・燕に於けるや、隱蔽なり。

猶ほ齒の唇有るがごときなり。

唇亡ぶれば則ち齒寒し。

今日趙を亡ぼさば、則ち明日齊・燕に及ばん。」と。

(注) 1 趙：戦国時代の国名。後出の秦・斉・燕も同じく国名。

2 蘇子：人名。

3 隱蔽：防壁。

\*のついた漢字は置き字

(現代語訳)

趙では食べるものがなくなり、穀物を斉に求めた。しかし斉は聞き入れなかった。蘇子が斉王に述べて言うことには、「趙の斉・燕に対する関係は防壁です。ちょうど齒に唇があるのと同じです。唇がなくなれば齒が直接寒気に触れます。今日(秦が)趙を滅ぼしたならば、明日には(秦の攻撃が)斉・燕に及んでくるでしょう。」と。

問一 傍線部①について、書き下し文を参考に返り点をつけよ。(送り仮名は不要)

問二 傍線部②を参考にし、空欄Aに適切な書き下し文を書け。

問三 本文において、A「齒」とB「唇」に例えられているものは何か。Aについては二つ、Bについては一つ、すべて一字で本文中より抜き出せ。